るすばん先生

宮川ひろ作　菊池貞雄絵

ポプラ社の創作童話 14
るすばん先生
宮川ひろ著
ポプラ社　昭和45年　128p　22cm
N. D. C.　913

検印省略

るすばん先生　　定価 450 円

1970年 4 月30日発行©

著者　宮川（みやがわ）ひろ

発行者　久保田忠夫

発行所　株式会社　ポプラ社

東京都新宿区須賀町 5
振替東京 149271

印刷所　新興印刷製本株式会社
製本所　石井製本工場

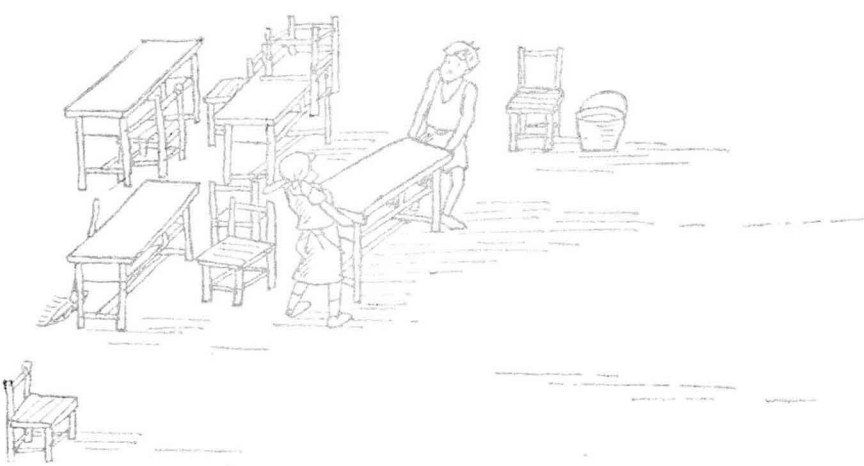
（落丁・乱丁本はいつでもおとりかえします）

「え？　ほんとう。」
テレビをみていた光男は、いきなり立ちあがるとつくえのまえに走っていきました。
だいぶあわてています。
夏休みはきょうでおしまい。
あしたから二学期がはじまるのですが――。

もくじ

1 あたらしい先生……6
2 夏休みのかお……21
3 給食をたべないきみ子ちゃん……32
4 たいそう着じけん……43
5 ぼくのきょうだい十三人だよ……53
6 沢田さんのほくろ……61

7 ケーキとプラモデル……75
8 ちび親分……87
9 れいてんでかんぱい……102
10 さよならはいいっこなし……114
あとがき……127



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

筆者の紹介

宮川ひろ（みやがわ ひろ）
一九二三年群馬に生まれ、金華学園卒業後、東京で数年小学校に勤務。一九六五年新日本童話教室（二期生）に学び、童話を書きはじめる。翌六六年「びわの実学校」に〈たからもの〉を発表し、同誌に投稿をつづける。日本児童文学者協会会員。

菊池貞雄（きくち さだお）
一九三六年青森に生まれ、武蔵野美術大学西洋画科卒業。東映動画スタジオで原画を製作するかたわら、〈ちいさいモモちゃん〉〈兵隊さんになったくま〉など、装てい・挿画でも活躍。

ポプラ社の創作童話

るすばん先生

宮川ひろ作
菊池貞雄絵

あたらしい先生

中村光男は、さっきからてつぼうにぶらさがって、なんかいでもさかあがりをくりかえしていました。ときどきやすんでは、ふうっと大きく息をはきました。なんだかげんきがありません。

そのかおがきゅうに明るくなったとおもったら、門のほうへむかって走りだしました。

「おーいヒロシー、おっそいなあ。」

光男はさも待ちくたびれたといういいかたをして、いま学校の門をはいってきたばかりの、ヒロシのかたをたたきました。

「ゆうべおそくまで、宿題やってたんだもの、ねむいよう。」
「宿題やったの？」
光男の目が一どつりあがってから、がっかりしたようにさがりました。
「だってねえ、〈やらないうちはどこへもいっちゃあいけない〉って、きのうは一日、おかあさん、つきっきりなんだぜ。くたびれちゃったなあ。」
くたびれたといっているくせに、ヒロシはなんだかせいせいとしたかおをしていました。
「ミッちゃん、とうとうやらなかったのか。」
「ゆうべになってから気がついたんだもの、もうまにあうかい。おこられておわりだもの、へっちゃらさあ。」
わざと強そうにいうと、光男は砂場のほうへむかって、ひとりで走りだしました。

れんしゅうちょうも、温度表も、ひとつもやらないうちに、長い夏休みがおわってしまったのです。そのことが、やっぱりすこし気になっていました。

（でも、ヒロシだって、どうせやってこないだろうからいいさ。ぼくだけやっていったら、ヒロシがかわいそうだもの。そうまでおもっていたのに……ヒロシのばかやろうめ。なにがくたびれただい。）

光男はおでこにあせをふきだしながら、走っていって、砂場の中へどしんとしりもちをついて、すわりこみました。

「おーいミッちゃん、はいってくれよう。二組にまけちゃうぞ！」

みんなはさっきから、となりの組とドッジボールをしていました。せめるのがうまい光男がいないので、まけそうなのです。エイジがしきりに光男をよんでいます。

それでも光男は、きこえないふりをして、砂でトンネルをつくっている一年生をみていました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

やがてチャイムがなりました。二学期の始業式がはじまります。みんな朝礼のときのように、校庭にならびました。

校長先生のうしろのほうに、みたことのないおばさんがひとり立っています。

「あの人がサンキュウ先生かなあ。」

うしろから、エイジが光男のせなかをつっつきました。

サンキュウ先生？　光男はエイジにいわれて、はじめておもいだしました。うけもちの小川先生は、きょうからずっとおやすみするということだったのです。小川先生には、もうじきあかちゃんが生まれるのでした。

あかちゃんをうむ先生のかわりにくる人のことを、産休先生っていうのだと、マユミがいいました。マユミはクラスいちばんのものしりなのです。

（そうだった。小川先生がこないんなら、小川先生にだされた宿題なんか、しんぱいしなくてもよかったんだ。）

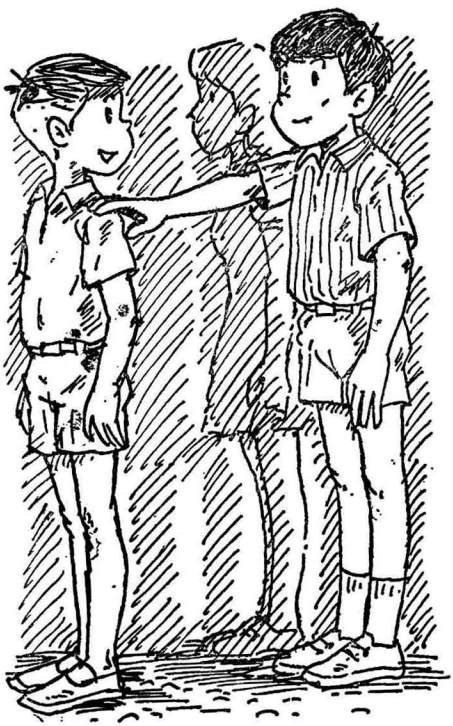
光男はむねのあたりがすっとして、きゅうにかるくなったような気がしました。

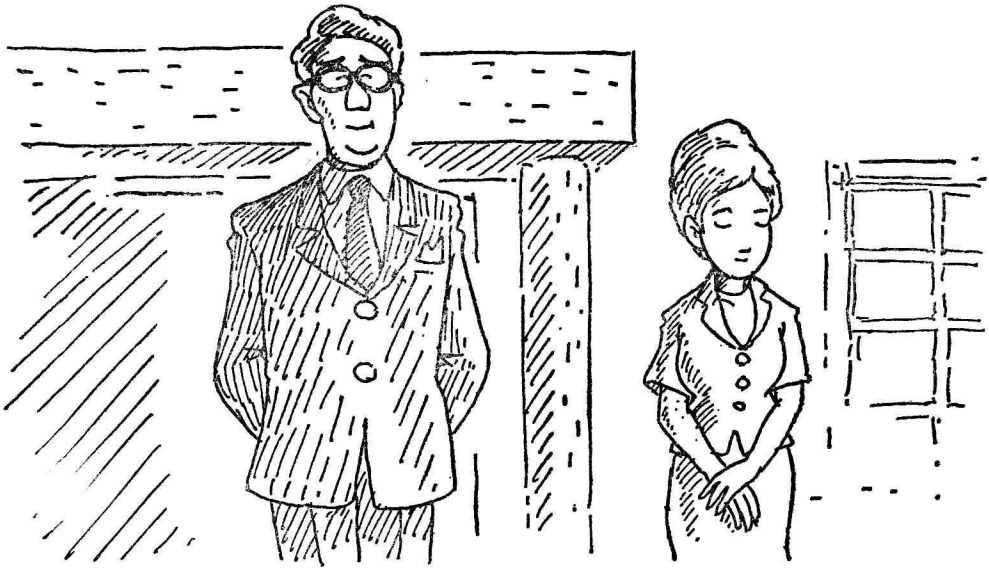
「あの人が、サンキュウ先生だぞー。」

光男も、まえにならんでいるヒロシのかたを、おしてやりました。

「あの人が先生かあ、ちがうよ。」

ヒロシが、くるりとうしろをむいていいました。そういわれると、ちがうような気もします。





その人は白いスーツをきて、はずかしそうに下をむいていました。ときどきかおをあげると、うれしそうにわらっています。かみのかたちもふつうです。みたところは、ほかの女の先生とおなじようなのに、どこかがちがっていました。なんとなくです。

「ちがうぞ、先生じゃあないやい。」

光男もうしろをむいて、エイジにいいました。

「先生でもない人が、あんなところにいるかよう。」

エイジがまたいいました。それもそうです。

そのとき校長先生が、
「きょうから小川先生にかわって、三年三組をうけもってくださる木村先生です。」
と、しょうかいされました。やっぱり先生だったのです。
「それみろ。」
エイジが耳のところまで口をよせて、ちいさい声でいいました。
それでも光男は、じっとしてまえをむいていました。校長先生にかわって、その木村先生が朝礼台の上にのぼられたからです。
「小川先生がおやすみのあいだだけ、るすばんにまいりました。るすばん先生です。わかいときに先生をやめてしまったので、もう二十年も、おかあさんしかしたことがありません。なにもわからない先生ですが、なかよくしてください。」
木村先生のあいさつは、それだけでおわりました。
（るすばん先生かあ。）

光男は、さっきまでの宿題のしんぱいなんか、もうわすれてしまいました。るすばんといえば、すぐいなかのおばあちゃんのことをおもいだします。

あれは光男が二年生のときの秋でした。おかあさんが「もうちょうえん」になって入院したことがありました。でんぽうをうって、長野のおばあちゃんに、きてもらったのです。

「なにがどこにあるのかもわからなくって、このるすばんは、ちっともやくにたたんわい。」

そういって、おばあちゃんはなんでも光男にききました。買い物にいくときでも、病院へいくときでも、いつでもついていってあげました。

（おばあちゃんのような先生なんだな。それならいろいろと、めんどうみてやらなければならないだろう。）

光男はおもしろくなってきたぞとおもいながら、教室へはいりま

した。

ところが、教室へはいってきた木村先生が、いちばん先にいったことばは、

「夏休みの宿題を、はじめに集めてしまいましょうね。」

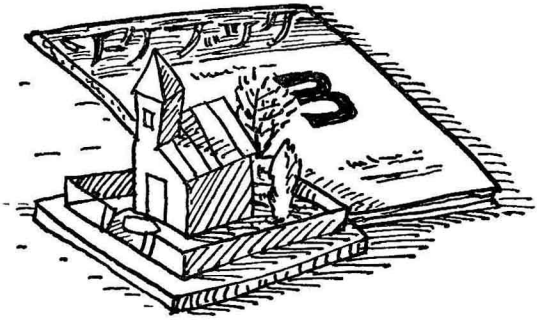
ということでした。

（なんだあ、るすばん先生だって、やっぱり小川先生とおんなじことじゃあないか。）

光男はとてもがっかりしました。しかたがないから、かたをすぼめてちいさくなっていました。

「先生、ミッちゃんはねえ、宿題をなにもやってこなかったんだよ。」

大きな声でいいつけたのは、ヒロシでした。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com